

論理的思考力創造プロジェクト

研究課

【提案1 理由】

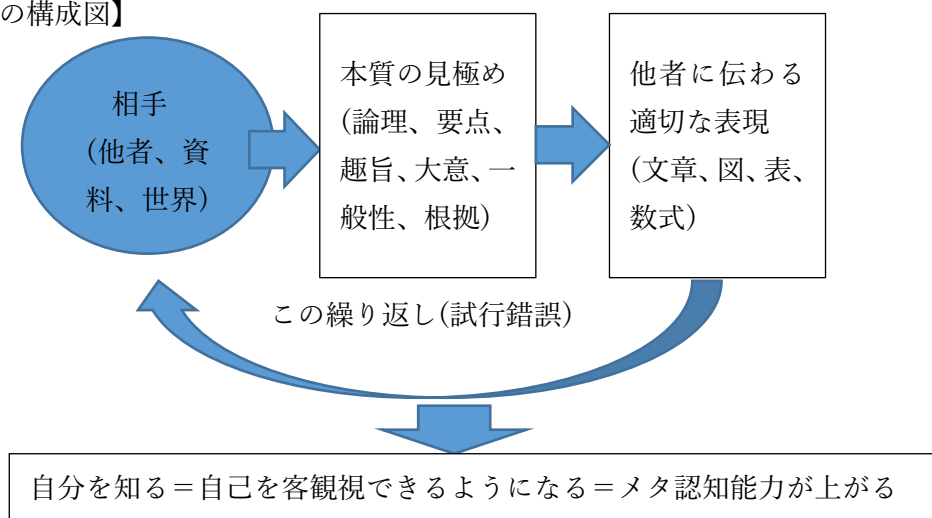
教科会、職員会議での話し合いを踏まえますと、先生方は、本校生徒の思考力・表現力の面でのつまずきを改善し、探究的な学び（通常授業、探究活動）を行うためには、以下のキーワードとコンセプト（声掛け）が重要であると考えているとまとめることができます。

キーワード 「本質・対話・試行錯誤」

コンセプト

- 1 本質（論理、結論、要約、要点整理、趣旨）、本当（事実、根拠）の追究
 - ・・・要するにどういうこと？（短く表現してみよう）
 - それって本当？（根拠を持って論じよう）
 - それだけかな？（他の可能性を考えよう）
- 2 他者との対話（他者に伝わる文章、筋道、出題意図、条件を満たした答え、他の人が読める字）
 - ・・・これはどういう意味？（他者に伝わる文章にしよう）
 - ここは何言いたいのか？（筋道を作ろう）
 - この問題は実は何を問うているのかな？（出題意図を読もう）
 - これで題意に答えているかな？（すべての条件を満たすよう注意しよう）
 - この字で伝わるかな？（他者に読んでもらうことを意識しよう）
- 3 試行錯誤（作図、作表、計算、多読、熟読、繰り返し、修正）
 - ・・・文章だけでは伝わりにくいよね？（図や表で分かりやすく表現してみよう）
 - まず手を動かして計算してみたら？（面倒なことにも挑戦しよう）
 - 全部、じっくり読んだ？（時間をかけて読み切ろう、あきらめず読もう）

【対話の構成図】



これらのキーワードを、通常教科や探究活動での指導で実践しやすいように一語に絞ると、やはり

対話

という言葉・行為に集約されるかと思います。相手との対話は、以下のすべてを含みます。

- (1)他者との対話
- (2)資料(文章)との対話
- (3)世界(自然、社会)との対話
- (4)自分自身との対話

この対話における力は、自分で考え表現する探究的な学びの基礎の力にあたります。この対話における力こそ、相手(他者、資料、世界)の中にある本質を見出し、それを適切に表現する力＝論理的思考力といえるでしょう。ここで求められている対話とは「おしゃべり」ではなく、本質を見出す活動であり適切な表現を求める活動であると定義することができます。そして、ここで求められている対話とは創造性を求める活動ではないし「なんでもあり」の自由(主体性)を強調する活動でもありません。創造性や自由(主体性)をよりよく発揮するための条件を整えたいのです。こうした対話を通じて、生徒は他者に寄り添う(他者の立場になって考える)ことを学び、自分を客観視(相対化)することを覚えていくことでしょう。自分と対話できるようになるわけです(メタ認知能力の向上)。

「対話による学び」を、今後の通常教科、探究活動で重視していきませんか？

【提案2 来年度の授業研究主題】

上記の認識に立つと、「対話による学び」によって基礎力を身につけることで、はじめて、探究的な学びを始めることができることになります。逆に言うと、この基礎力がないと、探究的な学びは絵に描いた餅になるでしょう。とすると、「重点目標」を下記のように修正すれば、「中高合同研究主題」をより効果的に追究できることになるように思われます。

令和6年度授業研究

(中高合同研究主題)より効果的に探究的な学びを深める授業をめざして(2年目)

(重点項目) ①自発的・能動的に学び始める課題設定

②課題解決のための協働的な学びと振り返りの場の設定



令和7年度授業研究

(中高合同研究主題)より効果的に探究的な学びを深める授業をめざして(3年目)

(重点項目) ①対話による学びを深める授業

②課題解決のための協働的な学びと振り返りの場の設定

【提案3 活動例とポイント】

とはいえ、先生方が日々実施されている教科指導、探究活動での指導と「対話による学び」の指導とが、どのように異なるのか、よくわからない(具体的なイメージがわからない)のが本音ではないでしょうか。はっきり言ってしまうと、大きな違いはありません。先生方は日々の指導において、常に生徒に問題の本質の把握とその適切な表現を求めてきたかと思いますが、それはまさに「対話による学び」です(というか、学びとは本来対話的であるということでしょう)。ただ、「対話による学び」をより強調した工夫を考えることはできます。上で、論理的思考力を養成する対話とは本質を見出す活動であり適切な表現を求める活動であるが、創造性を求める活動や自由(主体性)を強調する活動ではないとまとめたことが手掛かりです。

これらを一言でまとめると、論理的思考力を養成する対話とは正解(少なくとも不正解)のある活動であると言えます。自由作文には正解もなければ不正解もありますが、要約や条件のある作文には少なくとも不正解は存在するでしょう。体験活動を行って感想を書くという活動に不正解はないですが、(どう思ったか、どう感

じたかではなく)どんな活動だったか、どんな規則性があったか、どんな変化があったか、現象をまとめる活動には不正解は存在するでしょう。まとめが事実と異なるという事態があるからです。

必ず正解・不正解のある活動を入れていく、その際、文章だけでなく、表やグラフ、数式で簡潔に表現する活動を入れていくという工夫が、「対話」をより強調した学習活動の要点です。

活動	「対話」による工夫のない学習活動(例)	「対話」をより強調する工夫のされた学習活動(例)	ポイント
文章を書く	(1)資料を読んだの自由感想文作成 (2)自由英作文作成 (3)体験活動をしての自由感想文作成	(1)(2)・要約を入れる ・賛成、反対などの立場明確にさせる ・主張の異なり、プロットを表にまとめる ・「理由を二つ」や「～のキーワードを必ず用いて」など条件を課す (3)・現象の説明(まとめ)をまずさせる ・現象の異なりを表にまとめる	・自分の感性のまま記述させず、条件に合わせて表現をする＝以下 A ・漏れと重複がないように表にまとめる＝以下 B
話し合う	(1)一つの答えに収束する問題について話し合う (2)あることの自分の感想を披露しあう	(1)(2)・主張の異なり(複数の答え、解法)がある問題について話し合う ・それぞれの考えの特徴や長短について表にまとめる ・ディベートする (2)・感想から共通点を探り、相違点・対立点を探る活動につなげる ・変化、深まりについて振り返る	・複数の主張を比較した上で結論を出す ・ B ・自分の考えをいったん括弧に入れて決められた立場から考えてみる ・対立点も考えさせる／示唆する ・どう変化したか意識させる
読む	(1)小説を登場人物に共感しながら読む (2)評論を頭の中で理解しようとする (3)契約、法令、定義について、意味を厳密にしないまま(感覚に頼って)活用する	(1)・小説を登場人物の人間関係や発言と発言の相違に着目して読む (2)・評論を読み、それぞれの主張の特徴や長短についてまとめる (3)・契約や法令、定義が「何を意味しないか(何を排除しているか)」も明確にしながら活用する ・複数の評論や契約書、法令、定義を比較検討する	・読み手の共感や感想をいったん括弧に入れた上で、ストーリー上の客観的関係を把握する ・ B ・「何となく」という感覚や「大体は」という傾向性を排除する＝以下 C
問題を解く	(1)定式化された問題を解く (2)解答者の役割だけ務める (3)無条件の記述問題を解く	(1)・文章から表やグラフ、図に表す ・表・グラフ、図から式化し、解く (2)・作問してみる(答えに至る問いの条件を考える) ・採点してみる(問いの条件を満たしている確認する) (3)「理由を二つ」や「～のキーワードを必ず用いて」など条件を課す	・ B ・文章や表・グラフの本質を式が適切に表されていることを判断する ・ C ・どのような問題であれば式や答えが一意的に導かれるか判断する(誤答の推測ができるようになる) ・典型的誤答と正答との異なりについて気づく ・ A

